

## 「君は『女工哀史』を知っていますか？」

奥田 智喜

天野先生が審議会にどのような気持ちで出席されていたか、私が先生よりお聞きしたことをお話したい。

審議会とは霞ヶ関官僚の政策にお墨付きを与える行政機関であり、政策立案上必要な一種の通過儀礼であり、委員が官選である以上出席している学識経験者は御用学者に違いない……。

審議会に対する世間一般の評価とはだいたいこのようなものではないだろうか。もちろん審議会を見る視線に温度差はあるだろうし、政策決定プロセスにおける審議会の役割を重要視する人もいるだろう。だがネガティブに評価する向きがあることを否定する人はいないはずだ。

若い私たちにとって天野先生は環境経済学、環境政策の大家だが、それ以前に国際経済学の泰斗として既に令名を博していた。ケネンの『国際経済学』の翻訳を上ヶ原の図書館で見つけ、奥付の発行年を見てびっくりした記憶がある。先生が二〇代後半～三〇代初めに手がけた仕事ということになる。ピーター・ケネンはロバート・マンデルやロナルド・マッキノンと並び最適通貨圏理論で有名な人だ。

功成名を遂げた先生がなぜ審議会に？と私は疑問に思っていた。天野先生の実力発揮の場として審議会はいかにも役不足に見えたからだ(この「役不足」という言葉は正しい意味で使っている。念のため)。

ちょうど良い機会があったので、先生に直接伺ってみた。この時、志半ばで夭逝された田中彰一君も一緒に聞いておられた。田中君は天野先生

の関学最後の弟子ともいうべき人。国際経済学を学んだ後、天野先生の下で排出取引制度を考究された。

先生に聞いていただいたのは、審議会の役割や政策プロセスへの影響力に私が懐疑的であること、環境省の人たちは経済的手法についてよく研究していましたか、等々。先生は私の言葉の一つ一つに頷き、私が口を閉じると即座にこうおっしゃった。『君は『女工哀史』を知っていますか?』。

この反問が全てに答えているように思う。先生の言葉は続く。『資本主義というのは、そのまま放っておくと必ず『女工哀史』になります。そうならないための仕組みを作らないといけないんですね』。

これほど情熱的な答えが返ってくるとは正直思っていなかったので驚いた。天野先生にとっての「自由放任の予定調和」とは『女工哀史』だったのだ。同じ眼差しを先生は自然環境にも向けられていた。温暖化問題は人類喫緊の課題であり、『そうならないための仕組みを作らないといけない』。

先生が審議会に活躍の場を求められた理由がここにあると思う。中環審は(不思議なことに)議事録の作成と公開に熱心なところで、地球環境部会の議事録には天野先生のご活躍が活写されている。これを読むと審議会に対する先生の姿勢がよくわかる。開会劈頭にすぐさま発言、事務方の用意した資料に鋭い指摘を行う。霞ヶ関の論理に迎合しているようには見えない。

環境省の人たちは十分に研究していましたか？との問いに先生は頭を振った。『一から教えねばならなかった』。これは役人にお墨付きを与える御用学者の言葉ではない。政策の力で温暖化問題を安全な速度に導いてゆこうという気概を感じる。温暖化問題への対応について環境省と経産省では随分温度差があるのだが、そこに天野先生の縁の下での力持ちを感じる。環境省と経産省の力差はどうか？ともお聞きした。答えは『スト

ロー級とヘビー級の違いがあります』。

最後に、地球温暖化問題に関し我が国で最も人口に膾炙したキャッチフレーズについて。天野先生はmitigateを説明する時、こうっておられた。『私たちは二酸化炭素排出をゼロにすることはできませんから、温暖化を止めることはできません。温暖化の進行を緩めることしかできません。だから英語ではstopではなくmitigateが使われています。できないことを言っているのは日本だけです』。

奥田智喜(おくだ ともよし 関西学院大学総合  
政策研究科 修了生)